

# 論文の読みかた

原題「論文の戦略的読み方」

北條芳隆

## 本論の執筆にいたる経緯

2000年11月5日に発覚した旧石器ねつ造問題は、日本の考古学界を震撼させました。考古学という学問への信頼を完全に失墜させたからです。私は当時、四国東部の大学に勤務しておりましたし、古墳時代を研究していましたから、直接批判の矢面にたたされることはありませんでした。しかしけっして対岸の火事で済まされる問題ではなく、もっと構造的な部分から考え直し日本考古学の再構築をめざすことこそが、考古学に携わる我々に求められているはずだと考えました。

この事件をきっかけに、ネット上では考古学談義が一時期さかんになりました。私もまた、先の思いから、そこに参加した一人です。

議論が進むなかで、日本考古学の現状や問題点についてさまざまな角度から意見が交わされ、考古学の専門教育に関わる問題点も指摘されました。そのとき私は、最近の学生さんは論文の読み方を知らないし、教員の側もそれを教えていないのではないかと、との疑問を話題にしました。この点にかんする応答をみながら、それは私ひとりの疑問ではないことを感じとりました。したがって早急に改善しなければならない課題のひとつはここだ、と考えたのです。



こうした経緯のもと、専門的論文の読み方に戸惑う学生さんに向けて、なんらかの参考になれば、との思いで綴った小文が「論文の戦略的読み方」です。当時ネット上の議論をリードなさっていた岡安光彦さんのホームページに投稿し、公開されました。以下の文章は、そのときのものに若干の加除を施したものです。

なお公開時に「蛇足」としたおまけの文章は現在では時制が完全にずれているので削除しました。

## 1. 読むという行為の重要性

考古学の論文を専門的に読むとはどのようなことなのか。この点について、みなさんの多くは基礎的な訓練を受けていないように感じる場合があります。専門的知識を吸収する営みだと勘違いしている学生さんがいます。彼や彼女に、とある論文を課題として示し、ここには何が書いてあったのかを聞きますと、大抵は要領よくまとめてきます。そして著者の主張や結論に納得した様子でそのまま受け流してしまう場合も少なくありません。しかしそれでは完全に著者の思うがまま。素直な読者、無垢な信奉者の一人になったに過ぎないのです。

論文を専門的に読む、とはそういうことではなくて、「書くために読む」行為を指すのです。専門用語でいえば、批判的検討作業の一環とも言いますが、こうした読み方をしなければ、せっかくの論文ネタをみすみす見逃してしまいかねません。そもそも論文を書くという行為とは何なのかという、もっとも肝心な点も分からずじまいになってしまいます。

4年生になったら、必ず書かねばならないのが卒業論文です。そのとき専門的な読みかたを知らなかったら、論文執筆は単なる苦痛でしかありません。詰め込んだ知識を羅列するだけで終わったり、読書感想文めいた作文に終始するのが関の山ではないでしょうか。

もちろん、現在では論文の「書き方」と題する手引き書が数多くあることも承知しています。しかし所詮は泥縄的な対症療法の指南書という程度にしか利用できませんから、体裁を繕うという域を脱せません。

本当は高校生の頃に、または大学3年生までの間に、こうした「書くための読み方」をサークル活動や弁論大会・討論会での経験などを通して身につけるものと多くの大学教員は考えていますので、こんな基礎的な方法を教わらない皆さんも多いかと思います。いや、ひょっとしたら、大学教員の中にも、この方法を身につけていない方もいるかもしれません。まあ、そのあたりの問題は、実際に大学教員の論文を専門的に読んでみればたちどころに判明することですから、後の楽しみにすることにしましょう。

実はそれほど難しくはないのです。私にだってできたのですから。

ここで紹介する方法は、私自身が岡山大学の学部生だったときに、古代史の吉田晶先生や考古学の小野昭先生に教わったやり方を基礎にしています。それに、私は学部の5年生と6年生の頃に近藤義郎先生の鞆持ちをしていたこともありましたので、論文の読み込み方の不備についてはずいぶんとお叱りを受けました。その時に近藤先生からお借りした論文でみた、先生ご自身の書き込みなども参考にしています。考古学者がおこなう論文の読み方の単なる一形態かもしれませんが、興味のある方は読み進めてみてください。

## 2. 論文の取捨選択、論文から受ける取捨選択

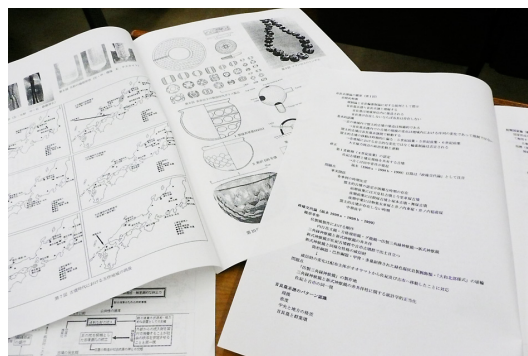
では実際の作業に入りましょう。興味関心のあるテーマ、専門的に取り扱いたいと決意した分野にかかわる論文を、どれでもいいですから手に取ってみてください。用意するものは、とりあえず赤・青鉛筆ぐらいで構いません（私はいざという時には本を古本屋に売り飛ばす予定にしていますので、書籍によっては柔らかい黒鉛筆を使います）。そして、鉛筆を弄びながらいいですから、ざっと読んでみてください。

読みにくいところ意味不明の個所には、鉛筆で線を引くなりしてチェックを入れましょう。無理して理解しよう、などと試みないほうがよいと思います。そのまま先に進んでください。そして意味不明の個所が冒頭からいくつもあつたり、最終の結論部分にも数多くのチェックがあつたりで、何を言いたいのかさえ分かりかねるようでしたら、ただちに解説作業を終了しましょう。なおその際には、論文の最後の方にある「結論」ないし「まとめ」の部分を再度拾い読みしていただくことをお勧めします。日本の考古学論文では、そこに著者がもっとも伝えたい内容が示されていることが多いのです。ですから、その部分が意味不明であれば、判定結果はあきらかです。読むに値しない論文だということで破棄してかまいません。

これには2通りの意味があります。そのひとつは、客観的にみても読むに値しない論文である場合です。そういう論文にわずらわされる時間の無駄を未然に排除することも重要な意味をもっています。

またふたつめは、あなたの準備状況が専門的論文を読む作業にまで到達していない場合です。特に学術用語の部分にチェックが多数あるようでしたら、普及書・入門書の方に立ち返るべきことを示しています。いずれにしても、いまのあなたが読んで生産的な結果が得られる論文でないことは間違いのないところですから、次をあたりましょう。

今のあなたが読むべき論文に到達するまで、この作



業は繰り返さなくてはなりません。たとえ教師や先輩に薦められた論文であっても、例外ではありません。要は今のあなたが読める論文を選択しなければ、次のステップに進めないのです（この点は論文だけにとどまりません。考古遺物の観察についても同じことがいえます。私は恩師のひとり都出比呂志先生から、実物を2回観察してなにも引き出せなかったら、そのテーマは諦める、と言われたことがあります、貴重な教えです）。

こうして論文の取舍選択をおこないますが、内容をおおざっぱに理解できそうな論文でしたら、どれでも構いません。次の図解的要約作業にとりかかるとにします。

### 3. 図解的要約作業

論文を理解するためには、要約が不可欠です。ただし、要約する行為自体に目的があるわけではありません。読もうとする論文は「何を根拠にして何を言いたいのか」の要点を把握することに尽きるのです。論文の不備な点を要領よくつかみ取ること、そのためにこそ要約は重要なのです。

そのもっとも簡便なやり方とは、論文全体の内容を図解してみることです。論証過程をいくつかに分けて、素材・根拠（観察結果）・結論（所見）の順に矢印で図化するのです。

論文の構成は、通常は章・節・項の3階層で成り立っていますから、ここでの図解も一般的には3層構造でまとめられます。だから項の部分の結論が、節の部分の結論の素材であったり、節の部分の結論が章の結論の根拠や前提になるといった関係になります。こうした分解作業をおこないますと、論文の全体構造が非常によく見えてくるのです。これができたら、論文を理解するという行為の80パーセントは完了したとみてよいでしょう。

ではこのような図解を、どうやったら比較的簡便に実施できるのか、この点の秘訣めいたことについて2・3説明することにしましょう。

#### （1）完全主義を排除する

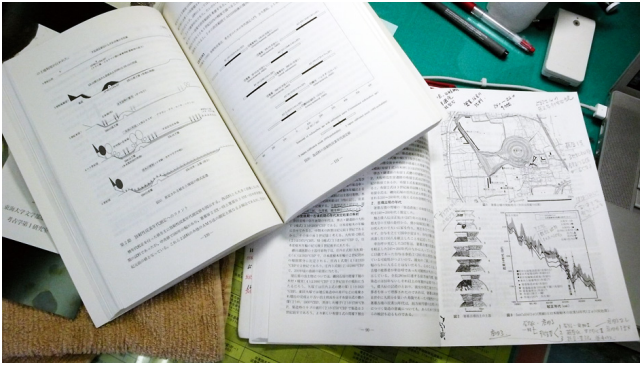
先に図解が必要だといいましたが、真面目な学生諸君ほど、それを完璧に仕上げようとします。しかし完璧さを追求すると、図解行為が自己目的化してしまいますから避けましょう。時間の無駄です。本質的な部分と思われるところだけを図解することで十分にこゝろ足ります。この点は意外に重要だと思います。というのも、完全主義は疲れるからです。長続きしない要因になってしまいかねません。だから最初にこのことを強調しておきます。

もちろんこう断言すると、ただちに反論があるでしょう。全部を丹念に読み込まなければ本質などわからないではないか、との反対意見です。しかしそれは違います。この部分に力が入っているぞ、というあなた自身の勘を重視してください。そして、要約すべきところを絞り込んでから取り組む姿勢をとりあえずは心がけてみてください。繰り返すと反復、そしてこうした要約作業に慣れることが肝心なのです。最初から完璧さを求めるご意見やご指導には黙ってうなずきながら、静かに耳を閉じておくほうが得策だと私は思います。

#### （2）段落単位で書き込みを

本文の余白は書き込みを行うべき場所だと心得て、読み進めながらどんどん書き込みを行いましょ。段落ごとに「何々についての概観」とか「意味のない資料紹介」とかの書き込みでかまいません。重要な主張のあるところには二重の丸印でもいいですし、チェックでもかまいません。

私は頁の口（端）の一部を折り返しています。先にチェックした疑問点についても同様です。とにかく目立つようにしておきましょう。近藤義郎先生の書き込みには、本文中の段落全体を×印で覆って、その上から「意味不明」と書いたものがあつたのを記憶しています。



図解の際には、この書き込みが威力を発揮します。「重要な主張」としてチェックしたところ同志のつながりや関係を把握することが要約の目的だからです。

ですから、この書き込みがすべての基本であるといっても過言ではありません。こう書きますと、論文が汚れて将来的に不便になることを危惧する意見も出てくるかもしれません。それはそうです、と申し上げます。

しかしもういっぼうで、論文は読む時点ごとに（つまり読んで書くまでを一連の行為として捉えますと）、その都度1回限りしか専門的読者にとっては意味をもたないという厳然たる事実もありますので、心配することはありません。次回に読む際には、まったく別の問題意識に沿って別の論文として読み返すこととなりますから、現在の書き込みも意味のないものと化してしまう可能性は高いといえましょう。そして、このことを将来的に実感するためにも、書き込みをどしどしおこなってください。私自身、学生の頃にはこんなところに重要性を見いだしていたのか、と呆れ返ることもあります。ただし、それはそれで重要なことだと思います。

### （3）図解すべき項目の選択

図解すべき価値のあるところは、先の書き込み内容で判断できます。当然のことですが「意味のない資料紹介」とか「概観」とかの部分は不要です。二重丸のところだけをピックアップして、先に述べた素材・根拠・結論の關係に配置し直すのです。その際に章立ての關係を考慮しますと、全体の考察のなかのどの部分とどの部分とが結びついているのか、このもっとも肝心なところが理解されてくるものと思います。

## 4. 論理の整合性を点検してみよう

図解的要約ができあがったら、つぎに図式の構図をみてみましょう。素材・根拠・結論の構造に矛盾がないか、飛躍がないかを点検するのです。この構造が自然な流れで矛盾ないようでしたら、それは論理に整合性があることを意味しますし、論証は成功していると判断可能な材料になります。

しかし全体は3層構造ですから、最後の結論部分まで、この図式を入念に点検してみましょう。よくみられるのは、節の部分を根拠として導かれる章ごとの結論部分に論理の飛躍があったり、章ごとの結論部分を根拠として導かれる最終の結論部分に論理の飛躍があったりする場合です。根拠として介在するのが論文自体の内容からではなくて、既存の命題だったり論理だったりする場合には特に要注意です。後に詳しく述べますが、論証しきれない部分の根拠づけに、これら既存の命題や論理は非常に便利な道具立てとして、よく使われるからです。既存の命題や論理とは、著名な学者の言葉であったり〇〇理論であったりしますが、たいていは本文中で引用されますし、最低限でも註のなかで解説される箇所ですので、特定は比較的容易です。そうした部分に注意しながら図式化してみると、論文の構造がよくわかることになります。

そして、この図ができあがったら、みなさんにとって非常に重要な武器になります。論理の飛躍があるところには、新しい論文ネタが潜んでいるではありませんか。著者の論理にどこか無理を感じたら、根拠の部分を見なさんそれぞれの「心の眼」で再度点検してみましょう。結論を導くためには依然不足している事柄があるはずで、根拠になるべき事柄です。それは何かを考え、そ

れを探ること自体が新しい研究テーマになるはずで、著者とは別の視点が育まれるのです。その新しい眼で遺跡や遺物の現物や報告書に接する可能性が開かれることになるのです。

論文を読むという行為それ自体が、実はもっとも基本的な取材活動である、ということがわかりただけたでしょうか。

## 5. 図解的要約の活用法

さて、ここまでは論文の要約作業に重点をおいて解説してきましたが、今度はそれをどのように活用するのかについて、お話ししたいと思います。先に申し上げたことと重複する内容もありますが、ここでは「評価」の側面と、「分析」にかかわる側面とに分けて説明します。

### (1) 論文の評価に関わる側面

先に図解的要約をおこなえば、論理の整合性をチェックすることが可能だといいました。しかし、それはあくまでも一般論としての話しです。実際にやってみれば、図解的要約自体が容易なもの、そうでないものとの両者があったり、全体としてみれば図解が可能でも、章ごとのつながりが図化できないものがあったり、逆に個別の章だけをとってみれば図解が可能でも、全体としての図解は容易でないものなど、いろいろな場合があります。学術論文と一口にいても、書き手の多様さに応じて、内容や構造も多様なものの混在状況だとみるのが正解です。

しかし、だからといって図解的要約が不要だ、などとは結論づけられません。図解的要約が可能かどうかそれ自体が、論文に対する重要な評価基準になると思うからです。言語道断とのそしりを受けるかもしれませんが、批判を恐れず私自信の価値判断に沿って、次の格言を示しておきましょう。

**図解的要約が簡単な論文は、一般的にみてよい論文である。  
論旨が明確な論文は、かならず図解的要約が可能である。**

ここでいう「よい」論文とは、論旨が明快で著者の主張内容が読み手に正確に伝わる、という特徴をもつ論文のことです。この「正確に伝わるか否か」にもっとも深く関わる要素は、なにをおいても論理の整合性だと思います。しかし、その整合性を逐一詳細に点検しながら読み進めているわけでもありません。通常の場合、その論文が整合的な論理展開であるのかどうかは、「スムーズに読めるか、途中でつかえてしまうかどうか」といった、読みやすさの度合いによって、特に意識せずとも誰もが「自然に」判断しているものと思います。したがってこの場合、「よい」論文とは「読みやすい」論文である、と単純化してもさしつかえないでしょう。

こうした観点から考えますと、図解的要約作業とは、いわば論文の「読みやすさ」にかかわる漠然とした心証や感触を、具体的な形に表し内容説明的に確認する役割をもっている、ということが出来るかと思えます。

もちろん、一見難解にみえる論文でも、図解的要約が可能であれば、その結果をとおして論旨を確認しうることを、上記の格言は意味するものです。この点に関連して、古典的名著といわれる論文のほとんどが、実は図解的要約の比較的容易な論文でもあることを強調しておきたいと思えます。このことは、私自身のこれまでの経験に照らしてみても、また前の職場であった徳島大学総合科学部の学生諸君に同様の図解的要約作業を課題として与えた結果をとおしてみても言えますので、自信をもって断言できます（もちろん、東海大学文学部歴史学科考古学専攻の学生のみなさんにも実体験していただいています）。

そして上記の格言は、「逆もまた真なり」を意味するものと理解していただいて構いません。いかえると、図解的要約が不可能な論文は論旨不明確な論文であり、悪い論文である、ということになります。

もちろん、ここでいう悪い論文が学問的な価値判断においても「悪」だと決め付けているわけではありません。非常に学問的な価値の高いものにだって、悪い論文はあると思います。常人の理解できる論理性を遙かに越えた崇高な論理や思想が宿っている場合だって十分にありえます。しかし、こうした作品をここで問題にしている訳ではありませんし、そのような判断は、誰か他人がおこなえば済むことです。当面のところは上記のような図式に即して評価してさしつかえないものと思います。

### (2) 論文の分析に関わる側面

先に述べたとおり、図解的要約をおこなうと論文の構図が理解できますので、これはみなさんにとって有力な武器となります。そして、もっとも重要なのが筋道です。筋道がよくわかるという状態は、一般的にみて「論理の整合性がある」といえますし、不鮮明なものは「論理に飛躍がある」といえます。

そして、もし後者の状態をどこかにみてとれたら、そこは論証が不十分な箇所として要チェックな部分です。もちろん、活字になっている論文で、そのような論理の飛躍をすぐに指摘できるものはそれほど多くはありません。査読者や編集者による事前のチェックが入っているからです。

ですから、この場合の「論理に飛躍がある」かどうかの見分けかたは、分析作業自体がどの程度有効性をもつのかについての点検（今回は省略）と、分析作業の結果から直接結論が導かれるような帰納法的構造になっているのか否かで判断するのが効果的です。

もう一度図式に立ち返って点検してみましょう。作業結果からなにがしかの結論が導かれ、最後のまとめにいたるまでの過程で、どこかに借り物の理論や誰か別人の研究成果が挿入されている形になっているのかどうか、です。

もしそうなら、そこが論証不十分な箇所なのです。そして今度は、筆者が結論としている部分の内容を導くためには、具体的には何と何の根拠が必要なのかを自分なりに考え直してみるとよいでしょう。仮定上の論証過程を考え、いわば理念形を想定したうえで、実際の図解とみくらべてみるのです。そうすると、読んだ論文のどこに問題があるのかがわかるはずです。

いま述べたのは「論理に飛躍がある」場合の分析方法でしたが、そうでない場合、つまり「論理の整合性がある」良い論文の場合にはどうしたらよいのでしょうか。学ぶべきところは、筋道の設定方法です。ここでも結論部分から逆にたどってみましょう。課題の設定や分析内容が、結論を導くために実に効果的に配置されている状態をみてとれるはずです。私の体験でいえば、近藤義郎先生の論文がそうです。たとえば「共同体と単位集団」（『考古学研究』第6巻1号、1959年）や「古墳以前の墳丘墓」（『岡山大学法文学部紀要』37、1977年）などの論文で試してみれば、図解が非常に楽であると同時に、その図が綺麗に仕上がることを確認いただけるとと思います。いかえると、論旨がきわめて明快なのです。

要するにこの節で私が強調したいのは、図解的要約によって、結論を支える論証過程の構造を把握する視点が自覚的に切り開かれるということです。これは論文を読む際に不可欠な視点ですし、実際に自分が論文を書く段に活用可能なのです。



## 6. 論証過程を分析してみよう

### (1) 論文の構成

図解的要約をおこない論文全体のつながりや構造を図化できたら、今度は論証過程の問題にも着目してみましょう。学術雑誌に掲載されている通常の考古学論文は、およそ次のような構造をとっています。

1. 課題の提示（検討方法の明示）
2. 分析作業の内容説明、およびその結果と所見の開示
3. 結論（展望を含む）

ここで問題となるのは、2と3との関係です。2が単一の分析作業で成り立っており、直後に3となる論文は意外に少ないことがわかるはずです。2の項目では主たる分析作業のほか、付帯的な分析作業や類似の先行的研究成果の紹介など、複数の分析結果が提示されていることが多いのです。

あるいは2の項目が2段構えになっている事例も少なくありません。後段の分析は前段の分析結果を前提として、それを別の側面からとらえ直すものであったり、並列的ではあるものの、前段との密接な関係をもつ分析作業が加わる形をとったり、というものが非常に多いはずですが。

あるいは形のうえでは3に近くても、結論の妥当性を高めるためのなんらかの所見を加えることが、必ずといってよいほど行われているはずです。こうした位置づけにあたる部分を2ダッシュとしておきましょう。ではなぜそうなることが多いのでしょうか。

それは第1に、個別分析結果から直接導き出せる結論が非常に限定的であることによります。設定する課題の内容や性格にもよりますが、結論とは多かれ少なかれ、ある程度の抽象化作業ですので、その抽象化へともっていくためには、現実の分析結果との間に「橋渡しの論理」を介在させる必要があるからです。別の言い方をしますと、筆者が結論へともっていきたい道筋をつけるためには文脈の整理が必要で、そこには必ずといってよいほど補助的な分析結果や所見が必要なのです。

また第2には、結論の妥当性を保証するために、単一の分析結果ではなく、複数の分析結果によって支持される関係を作り出す必要があるため、といった場合もあります。形の上で（あくまでも形の上だけの場合も多いのですが）帰納法的な論証形態をとるという指向性も、背後に強く作用していると思われる。

さらに第3には、日本語の論文では「起承転結」といった体裁が重視されてきたためだと思われます。いわば論文全体のリズム感に関わる問題ですが、これは作品としての書き手側の「完成度」、読み手側の「読後感」に深くかかわってきますので、無視できない重要性をもっています（卒業論文においても、この「起承転結」が重視されることはいまでもありません）。特に考古資料の実物の観察から帰納法的に論考を立ち上げる場合には、経験上、この体裁をとると書きやすいということも白状しておきます。

論文ごとに、事情はさまざまですが、また2の部分で並列的な分析をとる場合には、なかなか見つけにくいこともありますが、いずれも2から3までの間に、かならずといってよいほど2ダッシュがはさまっていることに注意していただければよいと思います。

なおこの2ダッシュの現れ方ですが、論文の構成上は1のところまででてくる場合もあります。あらかじめ橋渡しの論理や結論にいたる文脈を提示しておいて、それを証明するといった形で2が

展開されていく構造の論文が、それにあたります。なおその場合には、全体のリズムは先の「起承転結」よりは、「起結承承結」という形に近くなることが多いと思います。ちなみに最近の私自身の論文は、この後のほうの構成を意識して書く場合が多くなりました。こうした構成をとったほうが書きやすい課題を扱っているからです（別名を地に足のつかない「空中戦」ともいいますが）。

## (2) 「橋渡しの論理」の重要性

2ダッシュにこだわりながら論証過程の問題をみてきましたが、実はこの2ダッシュを特定することが、論文を読む際には大変重要な意味をもっています。結論がなにによって支えられているのかを見る場合、この部分は、実際に紹介されている分析結果と同等ないしそれ以上の重みをもつからです。そして、ここにこそ筆者の学説上の立場や歴史観が反映されているとみてよいでしょう。

「橋渡しの論理」は複数ありますし、考古学上の先行研究の成果である場合も、社会学や人類学からくる場合もあって様々ですが、そのなかのどれを選択するかによって、論文の位置づけは否応なく色分けされることとなります。とくに結論部分の抽象性が高ければ高いほど、この点は明瞭です。そして、ここを押さえることなくしては、論文を読んだことにはならないのではないかと、思う次第です。

要するに論文を読む行為の核心部分とは、筆者がよってたつ「橋渡しの論理」はなにかを把握する作業である、といえるのかもしれませんが。

## (3) 図解的要約の意味するところ

この点を押さえたうえで、後は1から3までのつながりに無理がないか、どこかで矛盾や論理の飛躍は生じていないかを点検していけばよいのです。もし論理の飛躍がみつかれば、飛躍を生じた原因を考えてみましょう。分析作業が不足している場合もあるでしょうし、橋渡しの論理として用意されたものが、実は橋渡しになっていない場合もあります。2の分析作業から導かれた結果の内容についても、同じような問題が含まれる場合も多々みられます。さらに、この「橋渡しの論理」が妥当性をもつのかどうか、別の論理に置き換えた場合には、結論はどう変わる可能性があるのかどうか、この点を考えてみるのも効果的です。

そうやって点検していくと、次第に「この部分を私だったらこうするのに」とか、思い切って論証過程や分析作業の順序を部分的入れ替えてみるとか、著者になりかわって思考をめぐらすようになるものと思います。結論にいたるまでの過程で、やや難解そうな修飾語句や言い回しを弄して「逃げ」を打つなどといった小細工（私自身もしばしばもちいる常套手段です）も見えてくるようになります。そうなったら専門的に論文を読むという行為はおおむね完成です。

さて、ここまで話してくると、わたくしの目論む「落ち」は見えてきたかと思えます。図解的要約作業とは、論文の制作過程を逆にたどる作業とほとんど等しいことだといいたいのです。論文の書き手も、論証過程を図解して、構成を組み立てたのちに本文を書いていくわけですから。したがって、こうした作業は、論文を書くための準備運動としても非常に効果的だと思いますので、参考にしていただければと思います。

結論を述べます。論文を読む行為とは、筆者の思考過程や論証法を、読み手側が、読み手側の目を通して再現しつつ問題点を見つけだすことであり、論文を書くための基礎作業であると。

(2010年4月21日改訂)

